

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同研究課題「日琉語族内の声調類型論の再構築」

2023 年度第 1 回研究会（通算第 9 回目）報告書

日時：2023 年 8 月 19 日（土）14:00～17:00

場所：AA 研 301 室

使用言語：日本語

共催：基幹研究「アジア・アフリカの言語動態の記述と記録：アジア・アフリカに生きる人々の言語・文化への深い理解を目指して（DDDLing）」

プログラム：

14:00-16:00 青井隼人（AA 研共同研究員，東京外国語大学）

Clark (1986), Japanese as a tone language のレビュー

16:30-18:00 全員

公開ワークショップの打ち合わせ

報告者：青井隼人（AA 研共同研究員，東京外国語大学）

2023 年度は本研究プロジェクトの最終年度にあたる。3 年間の成果を公表するための公開ワークショップを本年度末に開催予定である。今回の研究会では、そのワークショップの打ち合わせと Clark (1986) のレビューをおこなった。Clark は、本プロジェクトにとって先駆的研究のひとつと位置付けることができる。Clark の議論を整理した上で、日琉語族の語プロソディ体系を限局的声調体系として解釈した場合、従来の日本語アクセント論における論点はどのように読み替えられるのか、そしてそのときに問題になると予想される争点は何か、などについて意見を交換した。

青井隼人「Clark (1986), Japanese as a tone language のレビュー」

発表要旨

Clark (1986) は、Haraguchi (1977) などに代表されるピッチ・アクセント分析に対して、日本語を声調言語とする分析の妥当性を主張している。本発表では、Clark の議論を整理した上で、日琉語族の語プロソディ体系を限局的声調体系 (restricted tone system) として見做した場合に、従来の日本語アクセント論の論点がどのように読み替えられるのかを議論した。具体的に取り上げた論点は以下の3点である：

- (1) 多型アクセント体系と N 型アクセント体系の違いはどこにあるか；
- (2) 語声調と N 型アクセントの本質的な違いは何か；
- (3) 式と (アクセント) 核はそれぞれどのように解釈しなおせるか。